

IBM InfoSphere Identity Insight



インストール・ガイド

バージョン **9** リリース **0**

IBM InfoSphere Identity Insight



インストール・ガイド

バージョン **9** リリース **0**

注記

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、47 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

版に関する注記

本書は、IBM InfoSphere Identity Insight バージョン 9 リリース 0 (製品番号 5724-L71)、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM InfoSphere Identity Insight
Installation Guide
Version 9 Release 0

発行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

© Copyright IBM Corporation 2003, 2016.

目次

前書き	v	Oracle ステートメント・キャッシュのサイズ変更	15
IBM ソフトウェア・サポートへの連絡	vi		
第 1 章 システム要件と計画立案	1	第 3 章 製品のインストールおよび構成	17
システム要件の詳細	1	インストール・プログラムの開始	17
IBM AIX で実行する場合のシステム要件	1	製品のインストールの実行	18
Linux for System x で実行する場合のシステム要件	2		
Linux for Power Systems で実行する場合のシステム要件	3	第 4 章 製品のアップグレード	25
Linux for System z で実行する場合のシステム要件	4	製品のアップグレード	25
Microsoft Windows Server で実行する場合のシステム要件	5	サポートされているアップグレード・バージョン	25
システム体系の定義	7	アップグレード項目	25
パイプライン・デプロイメント	7	インストール・プログラムの開始	35
Windows 以外のインストール済み環境での保護ユーザーの作成	7	製品アップグレードの実行	37
ユーザー・ロールと責任	7		
第 2 章 データベースのセットアップ	11	第 5 章 インストールの確認	41
環境変数の設定	11	WebSphere Liberty サーバーの始動	41
DB2 環境変数	11	バッチ・コマンドを使用した WebSphere Liberty サーバーの始動	41
Oracle 環境変数	12	バッチ・コマンドを使用した WebSphere Liberty サーバーの停止	41
Oracle ユーザーへの CREATE VIEW 特権の付与	13	パイプラインの開始	42
データベースの作成および構成	14	構成コンソールへのログイン	43
エンティティ・データベースの作成	14		
クライアント認証の構成	14	第 6 章 製品のアンインストール	45
		特記事項	47
		索引	51

前書き

IBM InfoSphere Identity Insight は、人物または事物の真のアイデンティティー (誰が誰であるのか) の認識に関連する業務上の問題、ならびに、顧客、従業員、取引先、およびその他の外部関係者間の関係 (誰が誰を知っているのか) の潜在的な価値または危険性の特定に関連する業務上の問題を解決できるよう組織を支援します。この分析は、既存のビジネス・アプリケーションのコンテキストでリアルタイムで行われます。IBM InfoSphere Identity Insight は、あらゆる業界において脅威、不正、悪用、および共謀の防止に役立つ、即時性があり実用的な情報を提供します。

本書について

このインストール・ガイドは、IBM InfoSphere Identity Insight をインストールして構成する方法についての情報を提供します。

対象読者

このインストール・ガイドは、インストール担当者、システム・アドミニストレーター、および IBM プロフェッショナル・サービス担当員が製品をご使用の環境に正常にデプロイできるようにすることを目的としています。

前提条件および関連情報

このインストール・ガイドを使用する前に、以下の情報について理解しておいてください。

- IBM InfoSphere Identity Insight インフォメーション・センター (http://www.ibm.com/support/knowledgecenter/SS2HSB_9.0.0)
- IBM InfoSphere Identity Insight バージョン 9 リリース 0 リリース・ノート
- WebSphere Liberty サーバー資料
- ご使用のデータベース・ソフトウェア資料
- デプロイメントによっては、以下のいずれかの情報:
 - メッセージ・キューイング・ソフトウェア資料
 - 住所修正ソフトウェア資料
 - ETL ツール・ソフトウェア資料

ご意見の送付方法

IBM にお客様のご意見をお寄せください。本書または他の IBM InfoSphere Identity Insight 資料についてコメントがある場合は、次のフォームを使用してコメントをお送りください。

<http://www.ibm.com/software/data/rcf/>

IBM ソフトウェア・サポートへの連絡

IBM ソフトウェア・サポートは、製品の障害に関する支援を提供します。

始める前に

IBM ソフトウェア サポートに問い合わせるには、お客様の会社が有効な IBM ソフトウェア保守契約を結んでいること、およびお客様が IBM に問題を送信することを許可されていることが必要です。利用可能な保守契約の種類については、「*Software Support Handbook*」(techsupport.services.ibm.com/guides/services.html) の『Enhanced Support』を参照してください。

このタスクについて

問題について IBM ソフトウェア・サポートに連絡するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 問題を明確にし、背景情報を収集し、問題の重大度を判断します。詳しくは、「*Software Support Handbook*」(techsupport.services.ibm.com/guides/beforecontacting.html) の『Contacting IBM』を参照してください。
2. 診断情報を収集します。
3. IBM ソフトウェア・サポートを支援するために、問題レポートで以下の情報を提供できるように準備してください。
 - 製品の名前およびバージョン
 - データベースのタイプおよびバージョン
 - オペレーティング・システムの名前およびバージョン
4. 以下のいずれかの方法で問題を IBM ソフトウェア・サポートにお送りください。
 - オンライン: IBM ソフトウェア・サポート・サイト (<http://www.ibm.com/software/support/probsub.html>) の「**Submit and track problems**」をクリックします。
 - 電話: お住まいの国でおかけになる電話番号については、「IBM Software Support Handbook」(techsupport.services.ibm.com/guides/contacts.html) の「Contacts」のページにアクセスしてください。

次のタスク

お送りいただいた問題がソフトウェアの欠陥、資料の不足、資料の不正確さに関するもの場合、IBM ソフトウェア・サポートではプログラム診断依頼書 (APAR) を作成します。この APAR には該当の問題が詳細に記載されます。IBM ソフトウェア・サポートでは、APAR が解決されてフィックスが配布されるまでの間実装できる回避策を可能な限り提供しています。IBM では、解決済みの APAR をソフトウェア・サポート Web サイトで毎日公開しています。これにより、同じ問題を抱える別のユーザーが同じ解決策を利用できるようになります。

第 1 章 システム要件と計画立案

この参照セクションには、サポートされるプラットフォーム、システム要件、およびシステム体系に関する情報が含まれています。

システム要件の詳細

以下に、IBM サポート・チームに問題報告をオープンする前に、インストールして使用する必要のあるハードウェア製品およびソフトウェア製品の要件を示します。

IBM AIX で実行する場合のシステム要件

以下に、AIX[®] オペレーティング・システム上で IBM[®] InfoSphere[®] Identity Insight を実行するときにサポートされる製品をリストします。

表 1. IBM AIX で実行する場合のシステム要件

オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none">• IBM AIX 7.1L
ハードウェア要件	<ul style="list-style-type: none">• POWER7[®] (64 ビット)• POWER6[®]• POWER5
Java [™]	以下のものが、この製品とともにインストールされます。 <ul style="list-style-type: none">• IBM 64 ビット Java Runtime Environment バージョン 8
データベース	<ul style="list-style-type: none">• IBM DB2[®] Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1• IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5• Oracle 12c• Oracle 11g リリース 2 (11.2.0.1、11.2.0.2、またはそれ以降)
データベース・クライアント	<ul style="list-style-type: none">• DB2 クライアント v11.1 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合)• DB2 クライアント v10.5 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、および Windows 10.5 に接続されている場合)• Oracle 12c クライアント (Oracle 12c に接続されている場合)• Oracle 11g リリース 2 クライアント (Oracle 11g リリース 2 に接続されている場合)

表 1. IBM AIX で実行する場合のシステム要件 (続き)

Java Database Connectivity (JDBC) Clients	<ul style="list-style-type: none"> DB2 クライアント v11.1 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) DB2 クライアント v10.5 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 に接続されている場合) Oracle 12c JDBC ドライバー (Oracle 12c に接続されている場合) Oracle 11g JDBC ドライバー (Oracle 11g に接続されている場合)
Web ブラウザー	<ul style="list-style-type: none"> Mozilla Firefox
メッセージ・キューイング・ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> IBM WebSphere® MQ
その他	<ul style="list-style-type: none"> IBM C++ Runtime Environment Components for AIX。この要件について詳しくは、サポート情報 http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24025181 を参照してください。

Linux for System x で実行する場合のシステム要件

以下に、Linux for System x オペレーティング・システム上で IBM InfoSphere Identity Insight を実行するときにサポートされる製品をリストします。

表 2. Linux for System x で実行する場合のシステム要件

オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> Red Hat Enterprise Linux AS バージョン 7.0 Red Hat Enterprise Linux AS バージョン 6.0
ハードウェア要件	<ul style="list-style-type: none"> Intel x86_64
Java	<p>以下のものが、この製品とともにインストールされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> IBM 64 ビット Java Runtime Environment バージョン 8
データベース	<ul style="list-style-type: none"> IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 Oracle 12c Oracle 11g リリース 2 (11.2.0.1、11.2.0.2、またはそれ以降)

表 2. *Linux for System x* で実行する場合のシステム要件 (続き)

データベース・クライアント	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 クライアント v11.1 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) • DB2 クライアント v10.5 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、および Windows 10.5 に接続されている場合) • Oracle 12c クライアント (Oracle 12c に接続されている場合) • Oracle 11g リリース 2 クライアント (Oracle 11g リリース 2 に接続されている場合)
Java Database Connectivity (JDBC) Clients	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 クライアント v11.1 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) • DB2 クライアント v10.5 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 に接続されている場合) • Oracle 12c JDBC ドライバー (Oracle 12c に接続されている場合) • Oracle 11g JDBC ドライバー (Oracle 11g に接続されている場合)
Web ブラウザー	<ul style="list-style-type: none"> • Mozilla Firefox
サポートされるメッセージ・キューイング・ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> • IBM WebSphere MQ

Linux for Power Systems で実行する場合のシステム要件

以下に、Linux for Power Systems オペレーティング・システム、リトル・エンディアン・バージョン上で IBM InfoSphere Identity Insight を実行するときにサポートされる製品をリストします。

表 3. *Linux for Power Systems* で実行する場合のシステム要件

オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux AS バージョン 7.0 • Ubuntu バージョン 15
ハードウェア要件	<ul style="list-style-type: none"> • IBM Power System、POWER8、リトル・エンディアン
Java	<p>以下のものが、この製品とともにインストールされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM 64 ビット Java Runtime Environment バージョン 8

表 3. *Linux for Power Systems* で実行する場合のシステム要件 (続き)

データベース	<ul style="list-style-type: none"> • IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 • IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 • Oracle 12c • Oracle 11g リリース 2 (11.2.0.1、11.2.0.2、またはそれ以降)
データベース・クライアント	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 クライアント v11.1 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) • DB2 クライアント v10.5 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、および Windows 10.5 に接続されている場合) • Oracle 12c クライアント (Oracle 12c に接続されている場合) • Oracle 11g リリース 2 クライアント (Oracle 11g リリース 2 に接続されている場合)
Java Database Connectivity (JDBC) Clients	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 クライアント v11.1 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) • DB2 クライアント v10.5 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 に接続されている場合) • Oracle 12c JDBC ドライバー (Oracle 12c に接続されている場合) • Oracle 11g JDBC ドライバー (Oracle 11g に接続されている場合)
Web ブラウザー	<ul style="list-style-type: none"> • Mozilla Firefox
サポートされるメッセージ・キューイング・ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> • IBM WebSphere MQ

Linux for System z で実行する場合のシステム要件

以下に、Linux for System z[®] 64 ビット・オペレーティング・システム上で IBM InfoSphere Identity Insight を実行するときにサポートされる製品をリストします。

表 4. 64 ビット *Linux on System z* で実行する場合のシステム要件

オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> • Red Hat Enterprise Linux AS バージョン 7.0
ハードウェア要件	<ul style="list-style-type: none"> • IBM System z

表 4. 64 ビット Linux on System z で実行する場合のシステム要件 (続き)

Java	<p>以下のものが、この製品とともにインストールされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM 64 ビット Java Runtime Environment バージョン 8
データベース	<ul style="list-style-type: none"> • IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 • IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 • Oracle 12c • Oracle 11g リリース 2 (11.2.0.1、11.2.0.2、またはそれ以降)
データベース・クライアント	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 クライアント v11.1 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) • DB2 クライアント v10.5 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、および Windows 10.5 に接続されている場合) • Oracle 10g リリース 2 (10.2.0.2.0) クライアント (Oracle 11g リリース 1 (11.2.0.1) または 11g リリース 2 (11.2.0.2) に接続されている場合)
Java Database Connectivity (JDBC) Clients	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 クライアント v11.1 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) • DB2 クライアント v10.5 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 に接続されている場合) • Oracle 10g リリース 2 (10.2.0.2.0) クライアント (Oracle 11g リリース 1 (11.2.0.1) または 11g リリース 2 (11.2.0.2) に接続されている場合)
Web ブラウザー	<ul style="list-style-type: none"> • Mozilla Firefox
サポートされるメッセージ・キューイング・ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> • IBM WebSphere MQ

Microsoft Windows Server で実行する場合のシステム要件

以下に、Microsoft Windows Server 64 ビット・オペレーティング・システム上で IBM InfoSphere Identity Insight を実行するときにサポートされる製品をリストします。

表 5. Microsoft Windows Server で実行する場合のシステム要件

オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none"> • Microsoft Windows Server 2008 R2 • Microsoft Windows Server 2012 R2
ハードウェア要件	<ul style="list-style-type: none"> • Intel x86_64
Java	<p>以下のものが、この製品とともにインストールされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • IBM 64 ビット Java Runtime Environment バージョン 8
データベース	<ul style="list-style-type: none"> • IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 • IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 • Oracle 12c • Oracle 11g リリース 2 (11.2.0.1、11.2.0.2、またはそれ以降)
データベース・クライアント	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 クライアント v11.1 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) • DB2 クライアント v10.5 (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、および Windows 10.5 に接続されている場合) • Oracle 12c クライアント (Oracle 12c に接続されている場合) • Oracle 11g リリース 2 クライアント (Oracle 11g リリース 2 に接続されている場合)
Java Database Connectivity (JDBC) Clients	<ul style="list-style-type: none"> • DB2 クライアント v11.1 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 11.1 に接続されている場合) • DB2 クライアント v10.5 JDBC ドライバー (IBM DB2 Database for Linux、UNIX、または Windows 10.5 に接続されている場合) • Oracle 12c JDBC ドライバー (Oracle 12c に接続されている場合) • Oracle 11g JDBC ドライバー (Oracle 11g に接続されている場合)
Web ブラウザー	<ul style="list-style-type: none"> • Windows Internet Explorer 10 以上 • Mozilla Firefox
サポートされるメッセージ・キューイング・ソフトウェア	<ul style="list-style-type: none"> • IBM WebSphere MQ

システム体系の定義

製品のインストールでは、データベース構成とサーバー構成の計画を練る必要があります。

パイプライン・デプロイメント

パイプラインは、システム要件およびサーバー・リソースに応じて、単一のサーバーや複数のサーバーにインストールできます。

パイプラインをデプロイする場合、以下のパフォーマンス要因を検討してください。

- パイプラインは、単一形式で実行できます。または、同時並列処理スレッドを実行するように構成できます。
- 各 CPU は、1.5 から 2 のパイプラインを処理することも、並列処理パイプライン・スレッドを処理することもできます。
- 並列処理パイプラインは、一度に複数のデータ・ソースからデータを受信できます。したがって、単一パイプラインの数と同じになるようにファイルを手動で分割する必要はありません。

パイプラインをデプロイする場合、以下の要因も検討してください。

- パイプラインは、サポートされているすべてのハードウェアおよびオペレーティング・システム構成で実行できます。
- 可能ではありますが、データベースが存在するマシン上でパイプラインを実行しないでください。
- 並列処理パイプラインの構成は、複数のパイプラインの場合よりも少ない作業で済みます。
- 複数サーバー構成では、管理のためにより多くの作業と保守が必要です。
- 単一サーバー構成では、CPU 数に伴って指数関数的に増加する高価なハードウェアが必要です。

Windows 以外のインストール済み環境での保護ユーザーの作成

すべての Windows 以外のプラットフォームの場合、製品のインストール・プログラムを実行する保護ユーザーを作成します。

このタスクについて

root ユーザーとして、製品のインストール・プログラムを実行しないでください。

ユーザー・ロールと責任

ユーザー・ロールは、IBM InfoSphere Identity Insight を効率的にデプロイして使用するために完了する必要のある一般的なタスクを分類するのに役立ちます。さまざまなタイプのユーザーが IBM InfoSphere Identity Insight をさまざまな目的で使用する可能性があります。すなわち、ユーザーは、製品の使用において、1 つ以上のロールの責任を引き受けます。

さまざまなユーザー・ロールと責任に基づいて、ユーザーのグループを定義できます。

最も一般的なユーザー・ロールを以下に示します。

アナリスト

データを分析し、エンティティ、関係、およびアラートをレビューします。アナリストは、何が最も重要な結果であるかを定義し、システムがそのような結果を返すようにします。アナリストはオペレーターおよびアプリケーション・アドミニストレーターと密接に連携します。

オペレーター

必要に応じてロード品質レポートを提供しながら、システムにデータをロードし、パイプラインを実行し、システムが許容できる状態で稼働していることを確認します。オペレーターはまた、結果、例外、およびイベントをレビューします。オペレーターは、アナリスト、データ・ソース・アドミニストレーター、およびアプリケーション・アドミニストレーターと密接に連携します。

データ・ソース・アドミニストレーター

データをシステムにロードできるよう、データの準備をします。これには、データの UMF ファイルへの変換とそのファイルの検証が含まれます。データ・ソース・アドミニストレーターは、オペレーター、アプリケーション・アドミニストレーター、およびデータベース・アドミニストレーターと密接に連携します。

アプリケーション・アドミニストレーター

アプリケーションを構成します。これには、データ、エンティティ・モデル、およびルール構成が含まれます。アプリケーション・アドミニストレーターは、データ・ソース・アドミニストレーターおよびオペレーターと密接に連携してエンティティ・モデルを定義するとともに、データベース・アドミニストレーター、データ・ソース・アドミニストレーター、およびオペレーターと構成変更について調整します。また、アプリケーション・アドミニストレーターは、総合的なシステム・アドミニストレーター (存在する場合) との調整および協議も行います。

データベース・アドミニストレーター

データベースを適切に構成および調整して、アプリケーションで使用できるようにします。データベース・アドミニストレーターは、オペレーター、データ・ソース・アドミニストレーター、およびアプリケーション・アドミニストレーターと密接に連携します。

システム・アーキテクト

アプリケーションのデプロイメント計画において、ハードウェア要件およびソフトウェア要件の規模を判定し、工数を見積もります。システム・アーキテクトは、インストール担当者、データベース・アドミニストレーター、データ・ソース・アドミニストレーター、およびアプリケーション・アドミニストレーターと密接に連携して、デプロイメントにより構想、戦略、および目標が達成され、期待どおりの結果を提供しながらデプロイメントがビジネス・プロセスに確実に統合されるようにします。

インストール担当者

アプリケーションのインストールおよび初期構成を管理します。システムの

初期ユーザーをセットアップするのも、インストール担当者です。多くの場合、IBM プロフェッショナル・サービスがシステム・アーキテクトと協力して、これらの責任を果たします。

プログラマー

アプリケーションのデプロイメントがシームレスに環境に統合されるように、グラフィカル・インターフェースの設計および開発や、さまざまな機能に合わせたグラフィカル・インターフェースのカスタマイズを行います。プログラマーは、システム・アーキテクトおよびアプリケーション・アドミニストレーターと密接に連携します。また、適切な関係者に対して、その環境において最も効果的な方法でアラートの周知に努めることもよくあります。

セキュリティー・アーキテクト

プロジェクト・チームがセキュアなシステムを計画し、実装するようにします。セキュリティー・アーキテクトは、システム・アーキテクト、インストール担当者、およびデータベース・アドミニストレーターと密接に連携します。

第 2 章 データベースのセットアップ

製品をインストールする前に、必要なデータベースをセットアップする必要があります。

環境変数の設定

DB2 データベースまたは Oracle データベースの場合は、環境変数を設定する必要があります。

DB2 環境変数

ターゲット・マシン上で、ご使用のオペレーティング・システムに必要な以下のすべての環境変数を設定してください。

AIX 環境変数

注: これらの環境変数値は、同じ環境変数の既存のエントリーがあれば、必ずその前に付加する必要があります。

すべての環境変数を大文字にする必要があります。

表 6. DB2 データベースに関する AIX 環境変数

環境変数	値	条件
DB2DIR	DB2 ソフトウェア・インストール・パス	DB2DIR は DB2 クライアント/サーバー・ソフトウェアのインストール場所です。
DB2INSTANCE	DB2 データベース・インスタンス名	DB2INSTANCE は作成済みの DB2 データベース・インスタンスの名前です。
LIBPATH	\$DB2DIR/lib64: INSTALLDIRECTORY/lib	DB2DIR は DB2 クライアント/サーバー・ソフトウェアのインストール場所、INSTALLDIRECTORY は製品がインストールされる予定の場所です。

Linux 環境変数

表 7. DB2 データベースに関する Linux 環境変数

環境変数	値	条件
DB2DIR	DB2 ソフトウェア・インストール・パス	DB2DIR は DB2 クライアント/サーバー・ソフトウェアのインストール場所です。
DB2INSTANCE	DB2 データベース・インスタンス名	DB2INSTANCE は作成済みの DB2 データベース・インスタンスの名前です。

表 7. DB2 データベースに関する Linux 環境変数 (続き)

環境変数	値	条件
LD_LIBRARY_PATH	\$DB2DIR/lib64: INSTALLDIRECTORY/lib	DB2DIR は DB2 クライアント/サーバー・ソフトウェアのインストール場所、INSTALLDIRECTORY は製品がインストールされる予定の場所です。

Microsoft Windows 環境変数

Microsoft Windows 環境で環境変数をセットアップするときには、Microsoft Windows の 8.3 命名規則を使用する必要があります。環境変数にはスペースを含めないでください。

表 8. DB2 データベースに関する Microsoft Windows 環境変数

環境変数	値	条件
DB2DIR	DB2 ソフトウェア・インストール・パス	DB2DIR は、DB2 インスタンスが作成された場所です。一部のバージョンの DB2 では、代わりに DB2_HOME または DB2PATH を設定します。DB2DIR が見つからない場合、インストーラーはこれらを検索します。
DB2INSTANCE	DB2 データベース・インスタンス名	DB2INSTANCE は作成済みの DB2 データベース・インスタンスの名前です。
DB2CODEPAGE	DB2 データベースの CODEPAGE 値と同じに設定します。	一致しない場合、データ・ロード時に Latin-1/UTF-8 データに関してエンコードの問題が生じる可能性があります。

Oracle 環境変数

ターゲット・マシン上で、ご使用のオペレーティング・システムに必要な以下のすべての環境変数を設定してください。

注: これらの環境変数値は、同じ環境変数の既存のエントリがあれば、必ずその前に付加する必要があります。

すべての環境変数を大文字にする必要があります。

AIX 環境変数

表 9. Oracle データベースに関する AIX 環境変数

環境変数	値	条件
ORACLE_HOME	Oracle クライアント・ソフトウェアのインストール・ディレクトリー	ORACLE_HOME は Oracle クライアント・ソフトウェアがインストールされている場所です。
LIBPATH	\$ORACLE_HOME/ lib:<product install directory>/lib	ORACLE_HOME は Oracle クライアント・ソフトウェアのインストール・ディレクトリー、 <product_install_directory> は製品がインストールされる予定の場所です。

Linux 64 ビット環境変数

表 10. Oracle データベースに関する Linux 64 ビット環境変数

環境変数	値	条件
ORACLE_HOME	Oracle クライアント・ソフトウェアのインストール・ディレクトリー	ORACLE_HOME は Oracle クライアント・ソフトウェアがインストールされている場所です。
LD_LIBRARY_PATH	\$ORACLE_HOME/ lib:<product install directory>/lib	ORACLE_HOME は Oracle クライアント・ソフトウェアのインストール・ディレクトリー、 <product_install_directory> は製品がインストールされる予定の場所です。

Microsoft Windows 環境変数

Microsoft Windows 環境で環境変数をセットアップするときには、Microsoft Windows の 8.3 命名規則を使用する必要があります。環境変数にはスペースを含めないでください。

表 11. Oracle データベースに関する Microsoft Windows 環境変数

環境変数	値	条件
ORACLE_HOME	Oracle クライアント・ソフトウェアのインストール・ディレクトリー	ORACLE_HOME は Oracle クライアント・ソフトウェアがインストールされている場所です。

Oracle ユーザーへの CREATE VIEW 特権の付与

製品が正しく実行されるようにするには、Oracle データベース・ユーザーに CREATE VIEW 特権を付与する必要があります。

このタスクについて

CREATE VIEW 特権は、ロールに基づいて割り当てられるのではなく、ユーザーに対して直接割り当てする必要があります。

データベースの作成および構成

製品のすべてのコンポーネントが使用する、エンティティ・データベースとも呼ばれる単一のデータベースを作成します。

エンティティ・データベースの作成

アイデンティティ、エンティティ、関係、およびアラートを保管するだけでなく、構成コンソール構成情報とアプリケーション・モニター情報も保管するパイプライン用のデータベースを作成する必要があります。

このタスクについて

新規データベースを作成する手順については、ご使用のデータベースの資料を参照してください。

データベース名には大文字を使用してください。

クライアント認証の構成

クライアント認証を使用すると、パイプラインの .ini ファイルで追加のユーザー名やパスワードの資格情報を提供しなくても、ユーザーはエンティティ・データベースに接続することができます。

このタスクについて

クライアント認証は、トラステッド OS データベース認証とも呼ばれます。クライアント認証を使用すると、現在ログインしているユーザー名を使用して接続を作成できます。この認証スキームは、オペレーティング・システムが既にそのユーザーを正しく認証していることを信頼するものです。クライアント認証は、DB2 および Oracle の各データベース・プラットフォームに対して使用できます。パイプラインおよび IBM WebSphere 処理は、エンティティ・データベースにトラステッド・モードでアクセスできる OS ユーザーが実行する必要があります。複数のユーザーがそれらの処理を実行する必要がある場合は、詳細について IBM サポートにお問い合わせください。

DB2 データベースでのクライアント認証の構成

クライアント認証を使用するよう、DB2 をセットアップします。

手順

1. 以下のグローバル・データベース・サーバー構成オプションを設定します。
 - a. **authentication** の値を `client` に設定します。
 - b. **trust_allclnts** の値を `yes` に設定します。
 - c. **trust-clntauth** の値を `server` に設定します。

2. **db2 catalog database** コマンドの **authentication client** パラメーターを使用して、製品データベースをカタログします。
3. オペレーティング・システムと DB2 データベースのユーザー名を同期化します。
4. 標準 DB2 JDBC Type 4 ドライバーのほかに、DB2 JDBC Type 2 ドライバーもあることを確認します。これは、db2java.zip ファイルに含まれています。
5. 製品をインストールする際に、トラステッド認証を有効にします。

Oracle データベースでのクライアント認証の構成

クライアント認証を使用するよう、Oracle をセットアップします。

手順

1. 以下のグローバル・データベース・サーバー構成オプションを設定します。
 - a. **os_authent_prefix** の値を OPS\$ に設定します。
 - b. **remote_os_authent** の値を TRUE に設定します。
2. Oracle データベース・ユーザーを、そのユーザーが外部認証方式とデータベース認証方式の両方を使用できるように作成します。 構文例:

```
CREATE USER OPS$<user> IDENTIFIED BY <dbpassword> DEFAULT
TABLESPACE <tablespace> TEMPORARY TABLESPACE <temp-tablespace>
QUOTA UNLIMITED ON <tablespace>;
GRANT CONNECT, RESOURCE TO OPS$<user>;
```
3. 標準 Oracle JDBC Type 4 ドライバーのほかに、Oracle JDBC Type 2 ドライバーもあることを確認します。 Oracle の場合、これは ojdbc16.zip ファイルに含まれています。
4. 製品をインストールする際に、トラステッド認証を有効にします。 製品インストーラーでデータベース資格情報を要求されたときは、OPS\$ プレフィックスを付けたユーザー名を指定します。

Oracle ステートメント・キャッシュのサイズ変更

Oracle データベース・アドミニストレーターは、ステートメント・キャッシュを適切にサイズ変更する必要があります。

このタスクについて

本製品はステートメントを集中的に使用する可能性があります。このため、Oracle ステートメント・キャッシュが急速に増大し、デフォルトの Oracle データベース設定を超える場合があります。それらのパラメーターのサイズ変更とチューニングについて詳しくは、ご使用の Oracle の資料を参照してください。

手順

Oracle の **ALTER SYSTEM SET** コマンドを使用して、以下のパラメーターをサーバー・レベルで構成します。

SESSION_CACHED_CURSORS

このパラメーターに適した値は、パイプライン・スレッド当たり、または並列処理パイプライン・スレッド当たり約 20 個の同時カーソルです。

OPEN_CURSORS

このパラメーターに適した値は、パイプライン・スレッド当たり、または並列処理パイプライン・スレッド当たり約 20 個の同時カーソルです。

CURSOR_SHARING

このパラメーターは、パフォーマンスに大きく影響します。このパラメーターは、製品がバインド変数を幅広く使用し、アプリケーションはカーソル共有から大きな恩恵を受けるという事実に基づいて構成してください。

第 3 章 製品のインストールおよび構成

以下の手順を使用して、製品のインストールおよび構成を行います。

インストール・プログラムの開始

製品インストール・プログラムを開始するには、以下の手順を実行する必要があります。

始める前に

Microsoft Windows の場合:

製品インストール・ファイルをローカル・ドライブにコピーする必要があります。製品インストール・プログラムは、ネットワーク・ドライブからは実行されません。

AIX および Linux の場合:

GUI モードで実行しているインストーラー内でライセンス印刷機能を有効にするには、クライアント・マシン上で実行している X Window サブシステムにプリンターを定義する必要があります。

コマンド行モードで実行しているインストーラー内でライセンス印刷機能を有効にするには、インストール先のマシンにデフォルトの印刷キューとプリンターをセットアップする必要があります。

手順

1. IBM InfoSphere Identity Insight の製品ソフトウェア .tar ファイルを入手します。
2. .tar ファイルをターゲット・インストール・マシンのローカル・ドライブ上の一時ディレクトリーに unzip します。

注: 製品インストール・ファイルをローカル・ドライブにコピーします。製品インストール・プログラムは、ネットワーク・ドライブからは実行されません。
.tar ファイルは、必ず、ディレクトリー構造を何も変更せずに unzip してください。

製品インストール・ファイルを別の場所にコピーする場合は、必ず、インストール・ファイルの親ディレクトリー構造 ¥Disk1¥InstData¥VM が維持されるようにしてください。

3. ¥Disk1¥InstData¥VM ディレクトリーに移動し、インストーラー・プログラムを実行します。
 - インストーラーを GUI モードで実行するには、インストーラー・プログラムをダブルクリックするか実行します。

注: Microsoft Windows システムで、実行可能ファイルを右クリックして「管理者として実行」を選択して、インストールを実行します。UNIX システムでは、インストールは root ユーザー ID として実行しないことを強くお勧めします。

- インストーラーをコマンド行モードで実行するには、コマンド行から、インストーラー・プログラムを実行するときに `-i console` を付加します。

例: `prompt> ISII_900_aix_ppc.bin -i console`

注: 製品インストール・ファイルをローカル・ドライブにコピーします。製品インストール・プログラムは、ネットワーク・ドライブからは実行されません。`.tar` ファイルは、必ず、ディレクトリー構造を何も変更せずに `unzip` してください。

製品インストール・ファイルを別の場所にコピーする場合は、必ず、インストール・ファイルの親ディレクトリー構造 `¥Disk1¥InstData¥VM¥` が維持されるようにしてください。

オペレーティング・システムのプラットフォーム	インストーラー・ファイル
Microsoft Windows Server x86_64	ISII_900_win_x64.exe
IBM AIX	ISII_900_aix_ppc.bin
Linux for IBM System x (64 ビット)	ISII_900_linux_x64.bin
Linux for IBM z Systems (64 ビット)	ISII_900_linux_s390x.bin
Linux for IBM Power Systems 64 ビット - リトル・エンディアン	ISII_900_plnx_x64_le.bin

4. インストール・プログラム・ウィザードまたはコマンド行の指示に従います。

製品のインストールの実行

製品をインストールするには、以下のインストール・プログラムのパネルに入力します。

このタスクについて

Identity Insight v9.0 は、すべての製品機能をインストールします。アップグレード・インストールでは、以前のインストールでインストールされていなかった機能も含めて、すべての製品機能がインストールされます。

手順

1. スプラッシュ画面パネルで、製品のインストールに使用する言語を選択します。
2. 「導入 (Introduction)」パネルで、画面を確認します。
3. 「ご使用条件 - インストール環境 (Licence Agreement - Installation Environment)」パネルで、このインストールを実稼働環境で使用するのか非実稼働環境で使用するのかを選択します。
4. 「ご使用条件 - ソフトウェアご使用条件 (License Agreement - Software License Agreement)」パネルで、ご使用条件を確認し、「使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)」を選択して続行します。
5. 「宛先 - インストール・フォルダーの選択 (Destination - Choose Install Folder)」パネルで、IBM InfoSphere Identity Insight をインストールするディレクトリー (完全修飾パス) を入力するか参照します。インストール・ディ

レクトリーを参照する場合は、「参照 (Browse)」ボタンをクリックしてから、インストール・ディレクトリーの 1 レベル上のディレクトリーを参照する必要があります (必要であれば新規ディレクトリーを作成します)。次に、インストール・ディレクトリーを選択して、「開く (Open)」ボタンをクリックします。

6. 「データベース構成 - データベースのタイプ (Database Configuration - Type of Database)」パネルで、使用するデータベース製品を選択します。
7. 「データベース構成 - トラストド認証 (Database Configuration - Trusted Authentication)」パネルで、システム・ユーザーを使用してエンティティ・データベースにアクセスするかどうかを指定します。
8. 「データベース構成 - JDBC ドライバーの場所 (Database Configuration - JDBC Driver Location)」パネルで、データベース製品の JavaDatabase Connectivity (JDBC) クライアントが置かれるディレクトリー (完全修飾パス) を入力するか参照します。
9. 「データベース構成 - データベース情報 (Database Configuration - Database Information)」パネルで、インストールされるデータベース・タイプの構成情報を入力します。
10. 「データベース構成 - データベースへの取り込み (Database Configuration - Database Population)」パネルで、画面を確認し、データベース・スキーマを生成および更新するためのオプションを選択します。
11. 「WebSphere 構成 - WebSphere 情報 (WebSphere Configuration - WebSphere Information)」パネルで、WebSphere Application Server のインストール情報を入力します。
12. 「WebSphere 構成 - Identity Insight セキュリティー (WebSphere Configuration - Identity Insight Security)」パネルで、Identity Insight Web アプリケーションへのアクセス時に使用するアドミニストレーターの名とパスワードを入力します。
13. 「WebSphere 構成 - パイプライン入力トランスポート (WebSphere Configuration - Pipeline Input Transports)」パネルで、パイプラインと Web サービスの間の通信に使用するポート番号を入力します。
14. 「プリインストール要約 (Pre-Installation Summary)」パネルで要約を確認し (変更が必要な場合は「前へ (Previous)」ボタンをクリックします)、次に、「インストール (Install)」ボタンをクリックして、製品のインストールを開始します。

IBM InfoSphere Identity Insight インストール・パネルのワークシート

このワークシートには、インストール・パネルのすべての設定が含まれています。このワークシートを使って実際の設定値を記録してください。

「データベースのタイプ (Type of database)」

表 12. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベースのタイプ (type of database)」

設定	サポートされるバージョン	実際の設定値
IBM DB2 Universal Database™	バージョン 10.5 および 11.1	
Oracle Standard Edition	バージョン 11.2.0.2 および 12c	

「トラステッド認証 (Trusted authentication)」

表 13. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「トラステッド認証 (trusted authentication)」

設定	説明	実際の設定値
「あり (Yes)」	認証にシステム・ユーザーを使用します。これを選択した場合は、ご使用のデータベース製品の資料で手順を参照して、データベースのトラステッド認証を有効にする必要があります。	
「なし (No)」	選択したデータベース・タイプにトラステッド認証を使用しません。	(デフォルト設定)

「JDBC ファイルの場所 (JDBC file location)」

表 14. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「JDBC ファイルの場所 (JDBC file location)」

設定	説明	JDBC の場所
IBM DB2 Universal Database	IBM DB2 クライアント JDBC ドライバーの場所。	
Oracle Standard Edition	Oracle クライアント JAR ファイルの場所。	

「データベース情報 (Database information)」

表 15. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベース情報 (database information)」

設定	説明	実際の設定値
「データベース・サーバーのホスト名 (Database server hostname)」	エンティティ・データベースをホストするサーバーの完全修飾ホスト名または IP アドレス。	
「データベース名 (Database name)」 (IBM DB2 UDB)	エンティティ・データベースの名前。	

表 15. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベース情報 (database information)」 (続き)

設定	説明	実際の設定値
「データベース SID/サービス名 (Database SID/Service Name)」 (Oracle データベースのみ)	エンティティ・データベースの Oracle ID。	
「データベース・スキーマ (Database schema)」 (IBM DB2 データベースのみ)	DB2 データベース・スキーマの名前。	
「ユーザー名 (User name)」	このデータベースのアドミニストレーター・ユーザー名。 有効なユーザー名を指定する必要があります。 注: Oracle トラストッド/クライアント認証を使用する場合は、ユーザー名を入力するときに OPS\$ プレフィックスが必要です。例: OPS\$johndoe。	
「パスワード (Password)」	このデータベース用に提供されたユーザー名のアドミニストレーター・データベース・パスワード	
「データベース・ポート (Database port)」	TCP/IP データベース・ポート番号。	

「データベースへの取り込み (Database population)」

表 16. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベースへの取り込み (database population)」

設定	説明	実際の設定値
「表を自動作成する (Create tables automatically)」	データベース・スキーマとインストール済み環境に必要な表を作成するために必要な SQL を生成し、実行します。	(デフォルト設定)

表 16. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベースへの取り込み (database population)」 (続き)

設定	説明	実際の設定値
「SQL のみを生成する (Generate SQL only)」	<p>インストール済み環境に必要な表を作成して値を取り込むために必要な SQL を生成し、</p> <p><installation_directory>/sql/ ディレクトリー内の .sql ファイルに書き込みます。</p> <p>Microsoft Windows の場合: ISQL ユーティリティーは、大きなスクリプトを処理できないため、サポートされていません。ISQL ユーティリティーを使用すると、「続行するためのメモリーが不足しています (Insufficient memory to continue)」というエラー・メッセージで失敗します。この問題は、インストーラーに SQL スクリプトの生成と実行を任せると完全に回避されます。</p>	
「データベースへの取り込みをスキップする (Skip database population)」		

「WebSphere 情報 (WebSphere information)」

表 17. 「WebSphere 構成 (WebSphere configuration)」 - 「WebSphere Liberty 情報 (WebSphere Liberty information)」

設定	説明	実際の設定値
完全修飾ホスト名	WebSphere Liberty サーバーをホストするサーバーの完全修飾ホスト名または IP アドレス。	(デフォルトはインストール・プログラムを実行しているサーバー)
Web サーバーのポート番号 (http)		(デフォルトは 13510)
セキュア Web サーバーのポート番号 (https)		(デフォルトは 13511)

Identity Insight セキュリティー (Identity Insight security)

表 18. 「WebSphere 構成 (WebSphere configuration)」 - 「Identity Insight セキュリティー (Identity Insight Security)」

設定	説明	実際の設定値
「ユーザー名 (User Name)」	すべての Identity Insight Web 構成と検索機能に対する管理アクセス権限を持つユーザー。	(デフォルトは admin)
「パスワード (Password)」		

「パイプライン入力トランスポート (Pipeline Input Transport)」

表 19. 「WebSphere 構成 (WebSphere configuration)」 - 「パイプライン入力トランスポート (Pipeline Input Transport)」

設定	説明	実際の設定値
「ポート (Port)」	Web インターフェースとパイプラインの間の通信に使用されるポート番号。	(デフォルトは 13512)

第 4 章 製品のアップグレード

以下の手順を使用して、製品をアップグレードします。

始める前に

ご使用の IBM InfoSphere Identity Insight インストール済み環境をアップグレードする前に、IBM プロフェッショナル・サービスに連絡して、データベース・スキーマの追加や変更を考慮してください。

製品のアップグレード

以下の手順を使用して、製品をアップグレードします。

始める前に

ご使用の IBM InfoSphere Identity Insight インストール済み環境をアップグレードする前に、IBM プロフェッショナル・サービスに連絡して、データベース・スキーマの追加や変更を考慮してください。

サポートされているアップグレード・バージョン

製品インストーラーを使用してアップグレードできるのは、8.1 以上のバージョンだけです。それより前のバージョンからアップグレードする場合は、IBM ソフトウェア・サポートに連絡して支援を依頼してください。

アップグレード項目

以下の情報は、すべての製品アップグレードに関連しています。

変更された表と列

製品のバージョン 9.0 以降、以下の表と列は以前のバージョンから変更されています。

IBM InfoSphere® Identity Insight 9.0 へのアップグレード中に変更される表/列

更新された表

- CONFLICT_RULES - 新しい列が追加: ENABLED
- COMPONENT_GROUP - 新しい列が追加: ENABLE_TAGS
- UMF_QUERY_RESULT - エンティティごとにデータ・ソース・コードを含めるために変更
- UMF_SEARCH_RESULT - エンティティごとにデータ・ソース・コードを含めるために変更
- COMPONENT_GROUP
- COMPONENT_GROUP_DESC

IBM InfoSphere® Identity Insight 8.1 フィックスパック 4 へのアップグレード中に変更される表/列

更新された表

- COMPONENT_CONFIG_TAGS
- DQM_RULE
- DQM_RULE_PARAM
- DQM_RULE_SET
- LDR_MESSAGE_TYPE
- SYSTEM_PARAM
- UMF_DQM_MAPPING
- UMF_OUTPUT_FORMAT
- UMF_OUTPUT_PARAM
- UMF_OUTPUT_RULE

IBM InfoSphere® Identity Insight 8.1 フィックスパック 3 へのアップグレード中に変更される表/列

列を 10 進数から整数に変更

- CONFLICT_RULES.MIN_ALERT_THRESHOLD
- MATCH_MERGE_ATTR.CONF_WEIGHT
- MATCH_MERGE_ATTR.DENIAL_WEIGHT
- MATCH_MERGE_CONF.SCORE_WEIGHT
- MATCH_MERGE_RULES.REL_CONF
- MATCH_MERGE_RULES.LAS_SCORE
- MATCH_MERGE_RULES.LAS_GN_SCORE
- MATCH_MERGE_RULES.LAS_SN_SCORE

再作成された索引

- IX_CONF_RL_ID_DESC

列の追加

- ENTITY_TYPE.INCLUDE_SAME_TYPE_AS_CANDIDATE

注: 製品インストーラーは 8.1 より前のバージョンからのアップグレードをサポートしていません。以下の情報は参照用のみ提供されています。

IBM InfoSphere® Identity Insight バージョン 8.0 またはバージョン 8.0 フィックスパック 1 またはバージョン 8.0 フィックスパック 2 からのアップグレード時に推奨されない列

- SEP_CONFIG 表の MAX_CONFLICT_DEGREE 列

IBM® InfoSphere Identity Insight バージョン 8.0 またはバージョン 8 フィックスパック 1 からのアップグレード時に推奨されない表

IBM Global Name Recognition 機能を使用した拡張名前ハッシュ法に使用される以下の表は、推奨されなくなりました。

- LAS_CONFIG
- LAS_CULTURE_CODES

これらの表は、製品スキーマをバージョン 8 フィックスパック 2 にアップグレードしても自動的に削除されません。しかし、これらの機能はもはや製品に使用されていないため、これらの表を手動で削除しても問題ありません。

IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からのアップグレード時に推奨されない表

RELATION - 古い RELATION 表から新しい DISCLOSED_RELATIONS 表にデータをマイグレーションする場合は、製品 CD の <platform>%Software%sql%etc%common ディレクトリーにある適切な DISCLOSED_RELATION_MIGRATION.<database platform>.sql ファイルを実行する必要があります。

- REL_TYPE
- SEP_LOG
- SEP_CONFIG_PRE42
- UMF_EXCEPT_PRE42

IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からのアップグレード時に推奨されない列

- DD_TABLE 表の HAS_ACCOUNT_ID
- DD_TABLE 表の HAS_ENTITY
- SEP_RELATIONS 表の DISCLOSED
- UMF_TABLE_RELATION 表の REVERSE_DELETE

アップグレード中に上書きまたは削除されるカスタマイズされたビュー

バージョン 9.0 では、製品のインストール済み環境をアップグレードすると、以下のビューは上書きされます。

注: アップグレードする場合は、損失を防ぐために変更されたビューと表をバックアップする必要があります。スキーマまたはビューに対して行われたカスタムの変更を再適用するのは、お客様の責任になります。

IBM InfoSphere Identity Insight バージョン 9.0 へのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

BEST_NAME_CONFLICT
COG_CONFLICT_PATHS
COG_ENTITY_CONDATA
COG_ENTITY_DATA
COG_RELATIONSHIP_SUMMARY
COG_RESUME_CONFLICTS

SOA_COMPONENT_CONFIG_GROUPS
SOA_ROLE_ALERT_HDR_MULTI
VIS_0DEGREE_EXISTS
VIS_CONFLICT_LOG
VIS_ENTITY_CONDATA
VIS_ER_STATE_DT

IBM InfoSphere Identity Insight バージョン 8.1 フィックスパック 3 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

COG_CONFLICT_PATHS
COG_RESUME_CONFLICTS
CONFLICT_RPT
RESUME_CONFLICTS
SOA_CONFLICT_RULE
SOA_ER_RESULT_HEADER
SOA_ROLE_ALERT_HDR_ENT
SOA_ROLE_ALERT_HDR_MULTI
VIS_CONFLICT_DESC
VIS_CONFLICT_LOG
VIS_ENTITY_CONFLICTS
VIS_ENTITY_PROPERTIES
VIS_INBOX_ROLE_ALERT
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_ASGN
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_CLSD

IBM InfoSphere Identity Insight バージョン 8.1 フィックスパック 2 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

BEST_ENTITY_INFO
COG_CONFLICT_PATHS
COG_INBOX_ROLE_ALERT
COG_RELATED_ENTITIES
COG_RELATIONSHIP_SUMMARY
COG_RESUME_CONFLICTS
COG_ROLE_ALERT_DETAIL
COG_RPT_RE_UNION
CONFLICT_RPT
RESUME_CONFLICTS
RPT_RE_UNION
RPT_RESUME_RELS1_SUB

RPT_RESUME_RELS2_SUB
SOA_ALERT_ENTITY_LIST
SOA_ENT_NTWK_STATS
SOA_ENTITY_SUMMARIES
SOA_RELATED_ENTITIES
VIS_GEM_EVENT_ALERT_ASGN_DET
VIS_GEM_EVENT_ALERT_DET
VIS_GEM_EVENT_ALERT_UNASGN_DET
VIS_INBOX_GET_RULE
VIS_INBOX_ROLE_ALERT
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_ASGN
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_CLSD
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW_ASGN
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW_CLSD
VIS_MAA_ASGN_DET
VIS_MAA_UNASGN_DET
VIS_RA_UNASGN_SUM
VIS_RELATEDENTITIES
VIS_RELATIONSHIP_SUMMARY

IBM InfoSphere Identity Insight バージョン **8.1** フィックスパック **1** からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー

BEST_ENTITY_INFO
COG_DISCLOSURES_NAMES
COG_ENTITY_DISCLOSURES
COG_INBOX_ROLE_ALERT
COG_ROLE_ALERT_DETAIL
COG_RELATED_ENTITIES
COG_RPT_RE_UNION
CONFLICT_RPT
RPT_RESUME_RELS1_SUB
RPT_RESUME_RELS2_SUB
RPT_RE_UNION
SOA_ENTITY_SUMMARIES
VIS_DISTINCT_COUNTS
VIS_ENTITY_PROPERTIES

注: 製品インストーラーはバージョン 8.0 以前からのアップグレードをサポートしていません。以下の情報は参照用のみ提供されています。

IBM InfoSphere Identity Insight バージョン 8.0、**IBM InfoSphere Identity Insight** バージョン 8.0 フィックスパック 1、および **IBM InfoSphere Identity Insight** バージョン 8.0 フィックスパック 2 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

BEST_NUMBER_ALL
VIS_RELATIONSHIP_SUMMARY
RESUME_CONFLICTS
VIS_GEM_EVENT_ALERT_UNASGN_DET
VIS_GEM_EVENT_ALERT_ASGN_DET
VIS_GEM_EVENT_ALERT_DET
RPT_CONFLICT_ENTITIES
RPT_RESUME_RELS1_SUB
RPT_RESUME_RELS2_SUB
SOA_ENT_NTWRK_STATS
SOA_ADDR_MATCHED_DURING_ER

IBM Relationship Resolution バージョン 8.0 フィックスパック 1、および **IBM Relationship Resolution** バージョン 8.0 フィックスパック 2 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

SOA_IDENTITIES_AT_ALERT_TIME
SOA_NAMES_MATCHED_DURING_ER
SOA_ADDR_MATCHED_DURING_ER
SOA_NBR_MATCHED_DURING_ER
SOA_EMAILS_MATCHED_DURING_ER
SOA_ATTR_MATCHED_DURING_ER
SOA_NAME SOA_ADDRESS
SOA_NUMBER
SOA_CHARACTERISTIC
SOA_EMAIL
SOA_IDENTITIES
SOA_ER_RESULT_HEADER
SOA_BEST_NAME
SOA_BEST_ADDRESS
SOA_BEST_NUMBER
SOA_BEST_EMAIL
VIS_INBOX_GET_RULE
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW

VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW_ASGN
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW_CLSD
VIS_INBOX_ROLE_ALERT
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_ASGN
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_CLSD
VIS_RA_UNASGN_SUM
VIS_ENTITY_DISCLOSURES

IBM Relationship Resolution バージョン 8.0、**IBM Relationship Resolution** バージョン 8.0 フィックスパック 1、および **IBM Relationship Resolution** バージョン 8.0 フィックスパック 2 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

VIS_INBOX_GET_RULE
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW_ASGN
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_RAW_CLSD
VIS_INBOX_ROLE_ALERT
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_ASGN
VIS_INBOX_ROLE_ALERT_CLSD
VIS_RA_UNASGN_SUM

IBM Relationship Resolution バージョン 4.2、**IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1、**IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1 フィックスパック 1、および **IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1 フィックスパック 2 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

以下のビューのいずれかが変更されている場合は、**IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1、**IBM Relationship Resolution** バージョン 4.2、**IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1 フィックスパック 1、または **IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1 フィックスパック 2 からアップグレードした後に、再び変更を行う必要があります。

- VIS_MAA_UNASGN_SUM
- VIS_SEARCH_SUMMARY_RPT
- VIS_SEARCH_HISTORY_RPT
- VIS_GEM_EVENT_ALERT_UNASGN_SUM

IBM Relationship Resolution バージョン 4.2、**IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1、および **IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1 フィックスパック 1 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

以下のビューのいずれかが変更されている場合は、**IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1、**IBM Relationship Resolution** バージョン 4.2、または **IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1 フィックスパック 1 からアップグレードした後に、再び変更を行う必要があります。

- VIS_CONFLICT_DETAIL

- VIS_ENTITY_CONDATA
- VIS_DISTINCT_COUNTS
- SEARCH_RESULT_DETAIL
- VIS_ENTITY_DATA
- VIS_ENTITY_EMAIL_ADDR
- BEST_EMAIL_BY_IDENTITY
- VIS_GEM_EVENT
- VIS_GEM_EVENT_SUMMARY
- VIS_ENTITY_ATTRIBUTE
- BEST_ATTRIBUTE
- BEST_ENTITY_INFO
- VIS_ENTITY_DATA
- VIS_ASGN_CONFLICT_MM_RULE
- BEST_ATTRIBUTE_ALL
- BEST_ATTRIBUTE_ALL_BY_IDENTITY
- BEST_ATTRIBUTE_BY_IDENTITY

IBM Relationship Resolution バージョン 4.2 および **IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1 からのアップグレード時に上書きされる、カスタマイズされたビュー:

以下のビューのいずれかが変更されている場合は、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 または IBM Relationship Resolution バージョン 4.2 からアップグレードした後に、再び変更を行う必要があります。

- CONFLICT_RPT
- BEST_ATTRIBUTE
- SEARCH_RESULT_DETAIL
- BEST_ENTITY_INFO

IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

以下のビューはサポートされておらず、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からのアップグレード時に削除されます。

- RESUME_ATTRIBUTES
- RESUME_NUMBERS

以下のビューのいずれかが変更されている場合は、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からアップグレードした後に、再び変更を行う必要があります。

- CONFLICT_RPT
- CONFLICT_DISP
- RESUME_CONFLICTS
- BEST_NAME
- BEST_ADDRESS

- SEARCH_DISP
- QUALITY_SUMMARY
- VIS_RELATEDENTITIES
- VIS_MAA_UNASGN_SUM
- VIS_MAA_ASGN_DET
- VIS_MAA_UNASGN_DET
- VIS_ENTITY_DISCLOSURES
- VIS_ENTITY_CONFLICTS
- SEARCH_RESULT_DETAIL
- VIS_CONFLICT_MM_RULE
- SEARCH_RESULT_RPT

以下の非推奨ビューのいずれかが変更されている場合は、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からのアップグレード後、新規ビューにアップグレードした後に再び変更を行う必要があります。

- ENTITY1_DATA は VIS_CONFLICT_DETAIL に置き換えられます。
- ENTITY2_DATA は VIS_CONFLICT_DETAIL に置き換えられます。

IBM Relationship Resolution バージョン 4.2、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 フィックスパック 1、および IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 フィックスパック 2 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

以下のビューのいずれかが変更されている場合は、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1、IBM Relationship Resolution バージョン 4.2、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 フィックスパック 1、または IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 フィックスパック 2 からアップグレードした後に、再び変更を行う必要があります。

- VIS_MAA_UNASGN_SUM
- VIS_SEARCH_SUMMARY_RPT
- VIS_SEARCH_HISTORY_RPT
- VIS_GEM_EVENT_ALERT_UNASGN_SUM

IBM Relationship Resolution バージョン 4.2、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1、および IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 フィックスパック 1 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

以下のビューのいずれかが変更されている場合は、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1、IBM Relationship Resolution バージョン 4.2、または IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 フィックスパック 1 からアップグレードした後に、再び変更を行う必要があります。

- VIS_CONFLICT_DETAIL
- VIS_ENTITY_CONDATA
- VIS_DISTINCT_COUNTS
- SEARCH_RESULT_DETAIL
- VIS_ENTITY_DATA

- VIS_ENTITY_EMAIL_ADDR
- BEST_EMAIL_BY_IDENTITY
- VIS_GEM_EVENT
- VIS_GEM_EVENT_SUMMARY
- VIS_ENTITY_ATTRIBUTE
- BEST_ATTRIBUTE
- BEST_ENTITY_INFO
- VIS_ENTITY_DATA
- VIS_ASGN_CONFLICT_MM_RULE
- BEST_ATTRIBUTE_ALL
- BEST_ATTRIBUTE_ALL_BY_IDENTITY
- BEST_ATTRIBUTE_BY_IDENTITY

IBM Relationship Resolution バージョン 4.2 および **IBM Relationship Resolution** バージョン 4.1 からのアップグレード時に上書きされる、カスタマイズされたビュー:

以下のビューのいずれかが変更されている場合は、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 または IBM Relationship Resolution バージョン 4.2 からアップグレードした後に、再び変更を行う必要があります。

- CONFLICT_RPT
- BEST_ATTRIBUTE
- SEARCH_RESULT_DETAIL
- BEST_ENTITY_INFO

IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からのアップグレード時に上書きまたは削除される、カスタマイズされたビュー:

以下のビューはサポートされておらず、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からのアップグレード時に削除されます。

- RESUME_ATTRIBUTES
- RESUME_NUMBERS

以下のビューのいずれかが変更されている場合は、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からアップグレードした後に、再び変更を行う必要があります。

- CONFLICT_RPT
- CONFLICT_DISP
- RESUME_CONFLICTS
- BEST_NAME
- BEST_ADDRESS
- SEARCH_DISP
- QUALITY_SUMMARY
- VIS_RELATEDENTITIES
- VIS_MAA_UNASGN_SUM

- VIS_MAA_ASGN_DET
- VIS_MAA_UNASGN_DET
- VIS_ENTITY_DISCLOSURES
- VIS_ENTITY_CONFLICTS
- SEARCH_RESULT_DETAIL
- VIS_CONFLICT_MM_RULE
- SEARCH_RESULT_RPT

以下の非推奨ビューのいずれかが変更されている場合は、IBM Relationship Resolution バージョン 4.1 からのアップグレード後、新規ビューにアップグレードした後に再び変更を行う必要があります。

- ENTITY1_DATA は VIS_CONFLICT_DETAIL に置き換えられます。
- ENTITY2_DATA は VIS_CONFLICT_DETAIL に置き換えられます。

アップグレード中に移動されるファイル

バージョン 9.0 では、製品のインストール済み環境をアップグレードすると、以下のファイルは移動されます。

注: カスタマイズを実行した後で再作成が必要になった場合に備えて、特定のディレクトリは保持されます。

WebSphere が組み込み **WebSphere Application Server** から **WebSphere Liberty** にマイグレーションされた場合:

古い構成は `ewas.81` ディレクトリに保持されます。新規構成は `wlp` ディレクトリで実行されます。

個々の環境で拡張機能を活用して **Liberty** を構成できます。

Liberty には、**WebSphere** エレメントの簡素化された構成があるため、構成ユーティリティ・ツールは削除されます。

スクリプトの開始と停止

`startEAS` スクリプトと `stopEAS` スクリプトは、`bin` ディレクトリ内にある `startIIServer` と `stopIIServer` で置き換えられました。

srd-home ディレクトリの名前は **ibm-home** に変更されました

アップグレード前の `srd-home` のスナップショットは、`srd-home.81` ディレクトリに保持されます。

インストール・プログラムの開始

製品インストール・プログラムを開始するには、以下の手順を実行する必要があります。

始める前に

Microsoft Windows の場合:

製品インストール・ファイルをローカル・ドライブにコピーする必要があります。製品インストール・プログラムは、ネットワーク・ドライブからは実行されません。

AIX および **Linux** の場合:

GUI モードで実行しているインストーラー内でライセンス印刷機能を有効

にするには、クライアント・マシン上で実行している X Window サブシステムにプリンターを定義する必要があります。

コマンド行モードで実行しているインストーラー内でライセンス印刷機能を有効にするには、インストール先のマシンにデフォルトの印刷キューとプリンターをセットアップする必要があります。

手順

1. IBM InfoSphere Identity Insight の製品ソフトウェア .tar ファイルを入手します。
2. .tar ファイルをターゲット・インストール・マシンのローカル・ドライブ上の一時ディレクトリーに unzip します。

注: 製品インストール・ファイルをローカル・ドライブにコピーします。製品インストール・プログラムは、ネットワーク・ドライブからは実行されません。
.tar ファイルは、必ず、ディレクトリー構造を何も変更せずに unzip してください。

製品インストール・ファイルを別の場所にコピーする場合は、必ず、インストール・ファイルの親ディレクトリー構造 ¥Disk1¥InstData¥VM が維持されるようにしてください。

3. ¥Disk1¥InstData¥VM ディレクトリーに移動し、インストーラー・プログラムを実行します。
 - インストーラーを GUI モードで実行するには、インストーラー・プログラムをダブルクリックするか実行します。

注: Microsoft Windows システムで、実行可能ファイルを右クリックして「管理者として実行」を選択して、インストールを実行します。UNIX システムでは、インストールは root ユーザー ID として実行しないことを強くお勧めします。

- インストーラーをコマンド行モードで実行するには、コマンド行から、インストーラー・プログラムを実行するときに `-i console` を付加します。

例: `prompt> ISII_900_aix_ppc.bin -i console`

注: 製品インストール・ファイルをローカル・ドライブにコピーします。製品インストール・プログラムは、ネットワーク・ドライブからは実行されません。
.tar ファイルは、必ず、ディレクトリー構造を何も変更せずに unzip してください。

製品インストール・ファイルを別の場所にコピーする場合は、必ず、インストール・ファイルの親ディレクトリー構造 ¥Disk1¥InstData¥VM¥ が維持されるようにしてください。

オペレーティング・システムのプラットフォーム	インストーラー・ファイル
Microsoft Windows Server x86_64	ISII_900_win_x64.exe
IBM AIX	ISII_900_aix_ppc.bin
Linux for IBM System x (64 ビット)	ISII_900_linux_x64.bin
Linux for IBM z Systems (64 ビット)	ISII_900_linux_s390x.bin

オペレーティング・システムのプラットフォーム	インストーラー・ファイル
Linux for IBM Power Systems 64 ビット - リトル・エンディアン	ISII_900_plnx_x64_le.bin

4. インストール・プログラム・ウィザードまたはコマンド行の指示に従います。

製品アップグレードの実行

製品をアップグレードするには、以下のインストール・プログラムのパネルに入力します。

始める前に

Microsoft Windows の場合: 以前にパイプライン実行可能ファイルをサービスとしてインストールしてある場合は、アップグレードを実行する前に、パイプライン・サービスを手動で停止して登録取り消しをしておく必要があります。

このタスクについて

インストール済み環境をアップグレードすると、インストール・プログラムは以前にインストールされた製品機能 (ある場合) を検出して、アップグレードします。また、以前に入力された構成値を事前入力します。

手順

1. スプラッシュ画面パネルで、製品のインストールに使用する言語を選択します。
2. 「導入 (Introduction)」パネルで、画面を確認します。
3. 「ご使用条件 - インストール環境 (Licence Agreement - Installation Environment)」パネルで、このインストールを実稼働環境で使用するのか非実稼働環境で使用するのかを選択します。
4. 「ご使用条件 - ソフトウェアご使用条件 (License Agreement - Software License Agreement)」パネルで、ご使用条件を確認し、「使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)」を選択して続行します。
5. 「宛先 - インストール・フォルダーの選択 (Destination - Choose Install Folder)」パネルで、サポートされる IBM Identity Insight のアップグレード可能バージョンがインストールされているディレクトリー (完全修飾パス) を入力するか参照します。インストール・ディレクトリーを参照する場合は、「参照 (Browse)」ボタンをクリックしてから、インストール・ディレクトリーの 1 レベル上のディレクトリーを参照する必要があります (必要であれば新規ディレクトリーを作成します)。次に、インストール・ディレクトリーを選択して、「開く (Open)」ボタンをクリックします。
6. 「データベース構成 - データベース情報 (Database Configuration - Database Information)」パネルで、インストールされるデータベース・タイプの構成情報を確認して、パスワードを入力します。

7. 「データベース構成 - データベースへの取り込み (**Database Configuration - Database Population**)」パネルで、画面を確認し、データベース・スキーマを生成および更新するためのオプションを選択します。
8. 「**WebSphere 構成 - WebSphere 情報 (WebSphere Configuration - WebSphere Information)**」パネルで、WebSphere アップグレードの構成情報を確認します。
9. 「**WebSphere 構成 - Identity Insight セキュリティー (WebSphere Configuration - Identity Insight Security)**」パネルで、Identity Insight Web アプリケーションへのアクセス時に使用するアドミニストレーターのユーザー名とパスワードを入力します。
10. 「**WebSphere 構成 - パイプライン入力トランスポート (WebSphere Configuration - Pipeline Input Transports)**」パネルで、パイプラインと Web サービスの間の通信に使用するポート番号を確認します。
11. 「プリインストール要約 (**Pre-Installation Summary**)」パネルで要約を確認し(変更が必要な場合は「前へ (**Previous**)」ボタンをクリックします)、次に、「インストール (**Install**)」ボタンをクリックして、製品のインストールを開始します。

IBM InfoSphere Identity Insight アップグレード・パネルのワークシート

このワークシートには、アップグレード・パネルのすべての設定が含まれています。このワークシートを使って実際の設定値を記録してください。

「データベース情報 (Database information)」

表 20. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベース情報 (database information)」

設定	説明	実際の設定値
「データベース・サーバーのホスト名 (Database server hostname)」	エンティティー・データベースをホストするサーバーの完全修飾ホスト名または IP アドレス。	
「データベース名 (Database name)」 (IBM DB2 UDB)	エンティティー・データベースの名前。	
「データベース SID/サービス名 (Database SID/Service Name)」 (Oracle データベースのみ)	エンティティー・データベースの Oracle ID。	
「データベース・スキーマ (Database schema)」 (IBM DB2 データベースのみ)	DB2 データベース・スキーマの名前。	

表 20. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベース情報 (database information)」 (続き)

設定	説明	実際の設定値
「ユーザー名 (User name)」	このデータベースのアドミニストレーター・ユーザー名。 有効なユーザー名を指定する必要があります。 注: Oracle トラステッド/クライアント認証を使用する場合は、ユーザー名を入力するときに OPS\$ プレフィックスが必要です。例: OPS\$johndoe。	
「パスワード (Password)」	このデータベース用に提供されたユーザー名のアドミニストレーター・データベース・パスワード	
「データベース・ポート (Database port)」	TCP/IP データベース・ポート番号。	

「データベースへの取り込み (Database population)」

表 21. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベースへの取り込み (database population)」

設定	説明	実際の設定値
「表を自動作成する (Create tables automatically)」	データベース・スキーマとインストール済み環境に必要な表を作成するために必要な SQL を生成し、実行します。	(デフォルト設定)

表 21. 「データベース構成 (Database configuration)」 - 「データベースへの取り込み (database population)」 (続き)

設定	説明	実際の設定値
「SQL のみを生成する (Generate SQL only)」	<p>インストール済み環境に必要な表を作成して値を取り込むために必要な SQL を生成し、</p> <p><installation_directory>/sql/ ディレクトリー内の .sql ファイルに書き込みます。</p> <p>Microsoft Windows の場合: ISQL ユーティリティーは、大きなスクリプトを処理できないため、サポートされていません。ISQL ユーティリティーを使用すると、「続行するためのメモリーが不足しています (Insufficient memory to continue)」というエラー・メッセージで失敗します。この問題は、インストーラーに SQL スクリプトの生成と実行を任せると完全に回避されます。</p>	
「データベースへの取り込みをスキップする (Skip database population)」		

Identity Insight ユーザー情報 (Identity Insight User Information)

表 22. 「WebSphere 構成 (WebSphere configuration)」 - 「Identity Insight 情報 (Identity Insight Information)」

設定	説明	実際の設定値
「ユーザー名 (User Name)」	Identity Insight Web アプリケーションのアドミニストレーター名	(デフォルトは admin)
「パスワード (Password)」		

第 5 章 インストールの確認

以下に、インストールが正常に完了したか確認するために実行できる一連の作業を示します。

このタスクについて

実行する具体的な作業は、インストールした製品コンポーネントに一致する必要があります。

手順

1. <product installation directory>/installer/logs にあるインストール・ログを確認します。
2. WebSphere Liberty サーバーの始動。
3. パイプラインの開始。
4. 構成コンソールへのログイン。

WebSphere Liberty サーバーの始動

Analyst ツールキット・アプリケーションにアクセスするには、最初に bin/startIIServer バッチ・コマンドを実行して、アプリケーション・サーバーを始動する必要があります。

バッチ・コマンドを使用した WebSphere Liberty サーバーの始動

組み込み WebSphere Liberty サーバーを始動するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 製品インストールの bin ディレクトリーに移動します。
2. バッチ・コマンド・ファイルを実行します。
 - Windows オペレーティング・システムの場合は、startIIServer.bat を実行します。
 - Windows 以外のオペレーティング・システムの場合は、startIIServer を実行します。

バッチ・コマンドを使用した WebSphere Liberty サーバーの停止

WebSphere Liberty サーバーを停止するには、以下の手順を実行します。

手順

1. 製品インストールの bin ディレクトリーに移動します。
2. バッチ・コマンド・ファイルを実行します。

- Windows オペレーティング・システムの場合は、stopIIServer.bat を実行します。
- Windows 以外のオペレーティング・システムの場合は、stopIIServer を実行します。

パイプラインの開始

パイプラインでデータを受け取って処理するには、前もってパイプラインを開始しておく必要があります。データ・スループットを高めたり、さまざまなタイプのソース・データを処理したりするために、複数のパイプラインを実行するのが一般的です。以下の手順を使用して、パイプラインを開始するか、ダウンしているパイプラインを再始動します。

始める前に

- パイプラインをホストするパイプライン・ノードに、パイプライン実行可能ファイルがインストールされている必要があります。
- 開始するパイプラインに使用するパイプライン構成ファイルが、少なくとも 1 つ構成されている必要があります。使用するパイプライン構成ファイルをパイプライン開始コマンドの一部として指定できます。パイプライン・コマンドの一部として構成ファイルの名前を指定しない場合は、パイプライン構成ファイルがパイプライン・ノード上に置かれている必要があります、そのファイルは、実行可能ファイル (パイプライン名が指定されている) の名前に一致する必要があります。例えば、pipeline.ini です。
- データベース環境変数が設定されている必要があります。環境変数の設定を参照してください。
- スクリプトを使用してパイプラインを開始する場合は、必ず、開始するパイプラインと同じディレクトリーにスクリプトを配置してください。
- *DEFAULT_CONCURRENCY* システム・パラメーターが 1 より大きい値に設定されている場合、またはパイプライン・ノードのパイプライン構成ファイルに *concurrency* パラメーターを構成してある場合は、単一のパイプライン開始コマンドを使用して複数の並列パイプライン処理スレッドを開始することができます。

このタスクについて

パイプラインを開始するには、3 つのステップがあります。

手順

1. 各パイプラインは、そのパイプライン・ノードに対してユニーク名を持っている必要があります。このため、開始するパイプラインと同じ名前で作働しているパイプラインが他に存在しないようにしてください。(デフォルトのパイプライン名は pipeline です。) これを確認するには、コマンド・プロンプトで、次のコマンドを入力します。 `pipeline -n pipelinename -l`

ここで、*pipelinename* は新規パイプラインを開始するために使用する名前です。この名前が、構成コンソールに登録されているこのパイプラインの名前に一致することを確認してください。

2. コマンド・プロンプトで、次の形式で適切なパイプライン・コマンドのオプションとパラメーターを指定して、1 つ以上のパイプラインを開始します。

```
pipeline -option parameter
```

3. コマンドが機能し、パイプラインが開始され、アクティブであることを確認します。
 - a. システムが Microsoft Windows プラットフォームで稼働しており、サービス・パイプライン・オプションを使用している場合は、パイプラインの状況を Microsoft Windows サービスのコントロール・パネルで見ることができます。
 - b. システムが UNIX プラットフォームで稼働しており、デーモン・パイプライン・オプションを使用している場合は、次のコマンドを入力して、実行中のプロセスを確認できます。

```
ps -fu userid
```

ここで、*userid* はパイプラインを開始しているユーザーの ID です。

- c. または、コマンド・プロンプトで、次のコマンドを入力します。

```
pipeline -n pipelinename -l
```

ここで、*pipelinename* は、開始したばかりのパイプラインの名前です。パイプラインがアクティブである場合、コマンド・プロンプトは `Running` を返します。

構成コンソールへのログイン

構成コンソールにログインすると、システムの構成設定を表示および変更することができます。

始める前に

- パイプラインは、構成コンソールの開始前に実行しておく必要があります。
- 構成コンソールにアクセスできるようにするには、WebSphere Liberty サーバーが開始されている必要があります。

このタスクについて

ログインするには、インストール中に選択した **user ID** と **password** を使用するか、システム・アドミニストレーターによって指定された **user ID** と **password** を使用します。

手順

1. サポートされている Web ブラウザーで、`http://<hostname_or_ip_address>:<http_port>/console` を参照します。
2. ログイン・ウィンドウで、ユーザー ID とパスワードを入力します。デフォルトでは、userid は **admin** です。
3. 「ログイン (**Login**)」をクリックします。

注: 構成コンソールで構成を変更した場合はたいてい、新しい構成が使用されるようにするには、稼働中のすべてのパイプラインをいったん停止して再始動する必要があります。

第 6 章 製品のアンインストール

アンインストール・プログラムを実行して、製品を削除します。

始める前に

1. パイプラインを停止します。
2. WebSphere Application Server を停止します。

このタスクについて

アンインストール機能は、インストール処理時に作成されたデータベース、スキーマ、および表を考慮しません。それらは手動でアンインストールする必要があります。

手順

1. 以下のように、アンインストール・プログラムを実行します。

オプション	説明
Windows で、GUI から GUI モードで実行する	<ul style="list-style-type: none">• <code><install_location>/_uninst</code> ディレクトリに移動します。• <code>Uninstall.exe</code> ファイルをダブルクリックします。
Windows で、コマンド行から GUI モードで実行する	<ul style="list-style-type: none">• ディレクトリを <code><install_location>/_uninst</code> ディレクトリに変更します。• <code>Uninstall.exe</code> ファイルを実行します。 prompt> <code>Uninstall.exe</code>
Windows で、コマンド行モードで実行する	<ul style="list-style-type: none">• ディレクトリを <code><install_location>/_uninst</code> ディレクトリに変更します。• <code>Uninstall.exe</code> ファイルを、<code>-i console</code> オプションを指定して実行します。 prompt> <code>Uninstall.exe -i console</code>
AIX および Linux で、GUI から GUI モードで実行する	<ul style="list-style-type: none">• <code><install_location>/_uninst</code> ディレクトリに移動します。• <code>Uninstall</code> ファイルをダブルクリックします。

オプション	説明
AIX および Linux で、コマンド行から GUI モードで実行する	<ul style="list-style-type: none"> • ディレクトリーを <code>/<install_location>/_uninst</code> ディレクトリーに変更します。 • Uninstall ファイルを実行します。 prompt> Uninstall
AIX および Linux で、コマンド行モードで実行する	<ul style="list-style-type: none"> • ディレクトリーを <code>/<install_location>/_uninst</code> ディレクトリーに変更します。 • Uninstall ファイルを、-i console オプションを指定して実行します。 prompt> Uninstall -i console

2. 画面上の指示に従います。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。IBM InfoSphere Identity Insight バージョン 9.0。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
J46A/G4
555 Bailey Avenue
San Jose, CA 95141-1003
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。本書はプランニング目的としてのみ記述されています。記述内容は製品が使用可能になる前に変更になる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

© Copyright IBM Corp. 2003, 2016. All rights reserved.

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

本書では、IBM の商標および IBM 以外の商標の一部につき、それぞれが最初に出現する個所でマークを付けています。

IBM、IBM ロゴおよび ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corporation の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、<http://www.ibm.com/legal/copytrade.shtml> をご覧ください。

Adobe、Adobe ロゴ、PostScript、PostScript ロゴは、Adobe Systems Incorporated の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

インテル、Intel ロゴ、Intel Inside、Intel Inside ロゴ、Intel Centrino、Intel Centrino ロゴ、Celeron、Intel Xeon、Intel SpeedStep、Itanium、および Pentium は、Intel Corporation または子会社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

UNIX は The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標は、Oracle の米国およびその他の国における商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アップグレード 25
 カスタマイズされたビュー、上書き 27
 カスタマイズされたビュー、削除 27
 項目 25
 ファイル 35
アンインストール 45
インストール 17, 18, 37, 45
 確認 41
インストール・プログラム 17, 20, 35
 ワークシート 38
エンティティ・データベース
 作成 14

[カ行]

開始
 パイプライン 42
環境変数 11, 12
 設定 11
関連情報 v
クライアント認証 14
ご意見
 送付 v
ご意見の送付 v
構成コンソール
 ログイン 43
コマンド
 パイプラインの開始 42

[サ行]

サポート
 連絡 vi
システム体系
 定義 7
システム要件
 詳細 1
 64 ビット Linux、System z 4
 IBM AIX 1
 Linux Power Systems 3
 Linux System x 2
 Microsoft Windows Server (64 ビット) 6

システム要件と計画立案
 詳細 1
前提条件情報 v

[タ行]

データベース
 構成 14
 作成 14
 セットアップ 11

[ハ行]

パイプライン
 開始 42
 デプロイメント 7
 並列処理スレッド 7
保護ユーザー
 作成 7

[ヤ行]

ユーザーのグループ 8
ユーザー・ロール 8

[ラ行]

連絡
 IBM ソフトウェア・サポート vi
 ロールと責任 8

D

DB2
 クライアント認証、構成 14

I

IBM ソフトウェア・サポート
 連絡 vi

O

Oracle
 クライアント認証、構成 15
 ステートメントのキャッシュ、サイズ
 変更 15
 CREATE VIEW 特権 14

W

WebSphere Liberty
 停止、バッチ・コマンド 41
WebSphere Liberty サーバー
 開始、バッチ・コマンド 41



Printed in Japan

GC19-2869-01



日本アイ・ビー・エム株式会社

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21